地域に根ざした教育の概観と考察

ー環境教育と野外教育の接合領域としてー

高野孝子

(特活) エコプラス／早稲田大学

An Overview and an Inquiry into Place-Based Education - As a Joining Territory of Environmental and Outdoor Education -

Takako TAKANO

ECOPLUS, Waseda University

(受理日 2013年9月3日)

While 'place' has been a center of attention in many disciplines, the Japanese words equivalent to the concept of 'place' is multi-faceted and controversial. This paper overviews the discussion around the concepts of 'place' in literature as well as Japanese terms which may translate as 'place' and 'community'. The discourse around place-based education (PBE) is examined, and the 100-year history of the movement of the similar concept in Japan is outlined. It discusses the meaning of PBE in the context of globalization, and encourages Japanese practitioners and researchers in outdoor and environmental education to explore the perspectives of place as many 'relationships' linked to education for sustainability at the current time of high social, economic and environmental instability.

Key words: place-based education, outdoor education, experience, identity, sustainability

I はじめに

日本環境教育学会第24回大会(「びわこ大会」)は、びわこ成蹊スポーツ大学で開催された。キーワードに含まれた「自然」「体験」「持続可能性」は、環境教育と野外教育が重なり合う部分だ。同大学の飯田稔学長は国内の野外教育分野を長く率い、また近年、日本環境教育学会では、日本野外教育学会を含む関連した教育関係の学会との連携を深めることが一つの指針にもなっている。

そんな背景からか、今回の『環境教育』における、びわこ大会のテーマに関連した特集にあたり、野外教育と環境教育の接合領域を探るような

内容でと投稿の招待を受けた。

言うまでもなく、野外教育と環境教育は深く関連しあっている。私が英国エジンバラ大学で所属していたのは、「野外・環境教育科」であり、1990年代以降、持続可能な社会づくりを念頭に、両「教育」を同じ視野に置くのは英国においては自然な流れであった。

同大学に在籍していた2000年代初め頃、私が幾つかの場所での先住民たちの中で目の当たりにしたのは、Place-based education (PBE)のうねりだった。私は大地とのつながりと持続可能性という視点で、英国や北米の幾つかの場所での教育プログラムを研究対象としたが、その頃すでに

問い合わせ先 takano@aoni.waseda.jp

‘place’は、地理学や哲学などにとどまらず、さまざまな分野からの視座で取り上げられ、互いに影響を与えあっていた。一方、英語で発表される野外教育の文献に限って言えば、‘place’の意味や、野外教育の文脈での議論は比較的少なかった。

本稿では、野外教育と環境教育の接続領域を意識しながら、PBEや「地域に根ざした教育」について概観し、現状と課題の整理を試みる。ただし、分野は多岐に渡り、各用語の概念は広く複雑であるため、ここでの整理は限定的なものだ。

環境教育も野外教育も、それが展開される社会によって意味が変わると同時に、その時代の要請や変化によって、定義や役割が変わってくる。何かが「正しい」ということよりは、何を目指すかによって変化するものではないかと思う。そして異なる姿が並列していることもあろう。

「地域に根ざした教育」はかつて日本においても力強く提唱された時期があったが、今、改めてそれを問うことについて、限られた範囲の中ではあるが国内外の議論を整理し、展望を試みたい。

Ⅱ 場、place、地域についての考察

1 placeとは何か

場やplaceに関連した用語については、自然やnatureなどと同様に、思想や文化も内包してさまざまな捉え方や論争が続いてきた。いずれも定まった定義はないが、本稿における枠組みにつながる議論を提示してみたい。

‘place’に関して、そのとらえどころのなさはさまざま指摘されてきた (e.g. Giddens, 1990; Relph, 1976)。Gieryn (2000)は社会学における文献を総括し、‘space’との違いについても触れつつ ‘place’としての必要十分条件をあげる。それらは、①地理的な場所、②物体としての存在、③意味や価値を伴うこと。つまり、‘place’とは、宇宙の中で固有のスポットとして存在し、概念ではなく物質として形を伴い、社会生活に影響を与える積極的な意味を伴う存在だとする。

‘place’を人との関係において捉える視座は他の分野でも共通している。

文化地理学者らの多くはハイデガーの現象学において論じられた ‘dwelling’ や ‘being in a world’ (Heidegger, 1993, p.55)という考え方に影響を受けている。RelphやTuanにおける、rootedness、uprootedness、a sense of placeなどの概念と研究はその延長線上にある。placeとアイデンティティが深く関わっていることは数多くの研究者らが論じているし (e.g. Basso, 1996; Thomashow, 1995)、placeに根付いているという感覚 (rootedness) と幸福感はつながっているとする論者は少なくない (e.g. Berry, 1978; Harvey, 1993; Tuan, 1976)。ここで「根付いている (rootedness)」とは、ある土地に複数年の単位で暮らし、そこにまつわる文化的、文化地理的な要素が生活の中に織り込まれている、というのが一つの定義である (e.g. Cuthbertson, Heine, & Whitson, 1997)。

アイデンティティと土地との関係性を結びつけるのは、文学上の妄想だという批判に対し、Malpas (1999)は、ある人が持つplaceとの関係性は、尊厳を持つ人として暮らすための、基本的な組成だと反論する。さらにHeideggerの考え方として、土地とのつながりはアイデンティティだけにとどまらず、物や出来事からなる世界に関わり、世界について考え、世界の中に自分を位置づけることができる、存在そのものの可能性でもある、と説明する (Malpas, 1999)。

placeは権力や政治、ジェンダーなどさまざまな社会的課題を反映し、歴史や個々人の経験からなる複雑な構造物であり、精神的、物理的、文化的、歴史的、社会的な側面を持ち合わせている (Casey, 1996; Kahn, 1996)。

Placeが経験や体験そのものという考え方にも、多くの言及がある (e.g. Kahn, 1996; Relph, 1989)。Placeを人との関係の中で捉えた時、またplaceが体験そのものであると捉えた時に、環境教育ならびに野外教育両方の視座が入ってくる。教育の視点については次の章で展開したい。

2 場と地域

ここまで ‘place’ をあえて英単語のままで使っ

ていた。通常 place は「場」や「場所」と訳される。土地と訳される場合もあるだろう。何気なく使っているが、場と場所の意味は完全に同じだろうか。

岩崎 (2010, p.28-29) は、「場」という漢字は、さまざまな人々に開放され、多様な人々が集まって交わり、活動する場所、という原義があるとする。その上で「開かれ、生み出し、包み込む」という特質を持つ「場」は、「構造としての場」と「認識としての場」が互いに連動して、そのものも変容するという。そして「場」は個人が発見するものと述べる。

これは Kahn (1996) らが言う、place は社会の歴史や個人、人と人との経験や記憶などの複雑な構造物だ、という特質にあてはまる。

PBE を日本語で語る際、「場の教育」と「地域に根ざした教育」と同義に用いていいだろうか。岩崎の考えに沿えば、人びとが関係性を持ち活動する「場」は、地域の概念とも重なる部分があると言える。

近年、英語圏での実践者や研究者の中では、place-based education に代わって、place and community-based education という言葉が使われるようになり、community の要素を含むことを前提として PBE という用語を使うようになっていく。PBE の概念には、「場所」だけでなく人と人との関係性の集合体である地域社会を含んでいるということを、明確に意識化するためだ。

同様に、「地域」に根ざした教育という言葉によって、明確化される側面もあるだろう。いずれにしても、人びとの関係性や暮らしがある場や社会に根ざした、という文脈で理解すべきだ。場は地域を含み、地域は場を含む。PBE の日本語としては「場の教育」と「地域に根ざした教育」とを基本的に同義で使い、物理的な場所を強調したい時などに区別して説明をすることを提案したい。

3 PBE における地域の捉え方

それにしても「地域」とは何か。英語の 'locality' や 'community' 同様、さまざまな研

究分野で議論は絶えない。「地域に根ざした教育」の文脈においても、実践される場所や社会によって、捉え方に違いがあるはずだ。

しかしながら PBE が議論されてきた具体的なケースを見てみると、「生活圏」という捉え方が浮かび上がってくる。生活圏はそれぞれ広さが異なる。例えば、アラスカの狩猟採集民たちにとっての生活圏はとてつもなく広い。広域の市を構成する小区画としての「街」を地域としているところもあれば、学校を中心に、おおよそ生徒たちが通って来る範囲（生徒たちにとっての生活圏）としている例もある。水や電気が作られ、ゴミが廃棄される範囲や、広くバイオリージョンを place と捉えている場合もある。

いずれも暮らしや生存に関連する場を捉えている。日本でなら学校圏や、昔の集落や部落の単位などだろうか。昨今の大合併でできた行政区よりは小さいものだ。子どもたちを主体として考える場合と、市民を中心に据える場合とで異なることも考えられる。車で移動する人たちにとっての日常の生活圏は、バスや自転車の人たちよりも広いかもしれない。

本質的に、さまざまな関係性から成り立っている空間を「地域」と捉えることができる。まさに先述の「場」と重なる。自然との関係や時間との関係、家族や他人など、さまざまなものとの関係性が含まれる、またはそのものだ。こうした関係性から、技術や文化、伝統が生まれ、組織ができる。自然や人工物と折り合いをつけて人が景観を作りだし、歴史も地域の関係性の中から生まれてくる。

Altman and Chemers (1984, p.9) は、社会システムアプローチを提唱する中で、「環境、place、コミュニティ、社会」の概念は、互いに複雑に関係しあい分かつことができない、としているが、それが社会システムとしての「地域」を考えるヒントとなる。

Ⅲ 環境教育と野外教育の接合領域としての「場」

1 野外教育と環境教育の重なり合い

英国では近年、野外教育と環境教育の融合が進

み、大学でのコースも ‘Environmental Science and Outdoor Education’、‘Outdoor Studies (Environment)’ などと表現される。国際的に見ても、野外教育の枠組みの中に環境や持続可能な社会についての要素が入る流れにある。

Terry (1971)が ‘Teaching for Survival’ の中で「すべての教育は環境教育である」と記したように、また、環境教育や持続可能性教育はあらゆる人たち、場所、年代においてなされるべきという原則を思えば、あらゆる学科の中に環境教育または環境の視点が盛り込まれて行くのが望ましく、野外教育においても同様だろう。今は環境や持続可能な社会についての学びは、野外教育の中で重要な側面として認識されるようになっている。

環境教育においても、環境課題を解決する動機、知識、行動力をつけるためには、自然の中での多様な体験は欠かせない。Significant Life Experiences (SLE、人生における重要な経験)の研究では、幼い頃の野外や自然体験が、その後の環境行動につながったとする (Chawla, 1999; Palmer et al., 1998; Sward, 1999)。野外教育と重なる部分だ。野外教育は「教育一般」において重要な手法であるとともに、それが目指す人的社会的成長は環境教育の本筋でもあろう。野外教育が環境教育になせる貢献は小さくない。

2 野外教育と場の研究

体験を重視する野外教育にとって、placeまたは場、場所は核である。Titman (1994)は学校のグラウンドや遊び場の価値について調査し、子どもたちの環境的な経験において、場所のアイデンティティと自身のアイデンティティの関係はとても重要だとする。英国の野外教育研究においては、placeとアイデンティティの関係やa sense of placeの視点が注目され始めたのは、2000年前後からと比較的最近だ。英国の野外教育研究者にとってplaceは、意識の中では‘space’や「場所」に近く、関係性が織りなす「場」の意識が薄かったと言えるかもしれない。

2000年以降、野外教育の国際学会では、環境的、

生態的な視点はもちろん、文化や関連性を含んだplaceやlandscapeが積極的に取り上げられるようになった。次章で取り上げる、place-based educationもテーマとして増加している。直近の国際野外教育調査研究大会(IOERC 2011年)では、place-responsive pedagogy (ニュージーランド)、knowable places (オーストラリア)、旅から見える川と人の関係の変化 (カナダ)、光景の中の学び(スウェーデン)、the sense of place (英国)など、placeの視点でのさまざまな発表があった。

日本の野外教育分野においては、場と体験、場と関係性、場とアイデンティティに関する思想的かつ経験的な研究は少ない。最も野心的な試みは、土方圭が日本野外教育学会第16回大会(2013年7月)で発表した、場所を体験そのものと位置づける「風土的野外教育論」研究だろう(土方, 2013)。土方は「野外」を単純に戸外や自然としてしまうのではなく、人間の営みが刻印された「場」と捉えた教育の可能性を探る。まさに「場の教育」だ。野外教育に関し土方は、生活と切り離された「自然」の利用ではなく、暮らしや人間との関係性に根ざした教育としての理論的整備を今後の課題として掲げる。

土方によると、野外教育研究において、人の営みをも含んだ「場」を意識した資料や論考は、紀要と図書が主たる発表の場となっており(土方, per. comm. 13.07.24)、例として東原(1990)や張本(2002)、金子(2002)らを上げる。

上述の国際野外教育調査研究大会において、野外教育研究者である柳敏晴が日本の自然観について発表している。筆者も場とアイデンティティをテーマにした研究や(Takano, 2007; Takano, Higgins, & McLaughlin, 高野, 2009; 2009, 2011, 2012)、風土の視点 (Takano, 2006)、農山村の教育力 (高野, 2011)など、幾つかの発表がある。

環境教育と野外教育の接合領域に関して忘れてはならないのが、北欧におけるfriluftsliv、フリルフスリフの実践であり、考え方だ。ディープエコロジーもこの伝統を背景に生まれた (Reed & Rothenberg, 1993)。この環境哲学については別の機会に詳しく紹介したい。

IV Place-based education (PBE)、場の教育、 または、地域に根ざした教育

1 PBEの背景

Place-based education (PBE; 最近はplace and community- based educationとも言われる) という言葉が英語の文献で登場するようになったのは、1980年代頃からで、広く使われるようになったのは21世紀に入ってからだ。

欧米では、人類の生存を脅かすさまざまな環境課題は、人間による自然の見方や自然との関係性に問題がある、つまり人間が、物理的にも精神的にも、自然からどんどん離れてしまったことが問題だとする主張が多く聞かれる (e.g. O'Sullivan, 1999; Sterling, 2001)。それに伴って教育の根本的な改革が唱えられ、地球と人間の関係について総合的な教育の重要性が主張されている (Capra, 1997; Palmer, 1998)。

学校教育はある社会の主流である文化や価値観を補強するもので (Bourdieu & Passeron, 1994)、現在の「持続不可能な暮らし」を維持する役割を担っている (Orr, 1994; Sterling, 2001) とする声強い。しかし同時に、持続可能性の概念を追求する教育には、社会を変革する可能性があるとする研究者らもいる (Barr, 1998; Sterling, 2001)。

PBEは環境教育から派生し (地理学からという論者もある)、持続可能性教育の概念を含んだもので、英国やアメリカでは近年広がりを見せている。Smithらはこれがこれまでの学校教育の立ち位置を変化させ、青少年自身が地域をより良く変革するための力を身につけることにつながると論じる (Gruenewald & Smith, 2008; Smith, 2007)。

PBEは人と自然のかい離と、そこから派生すると主張される環境課題を背景にしているだけでなく、現代はその地域で暮らしていくために必要な教育がされていない、別の言い方をすれば、学べば学ぶほどその小さな地域から出て行かざるを得ない教育になっていること、そこの文化に適した教育になっていないことなどの問題意識も背景にあった。特に、各国の「地方」と言われる場所

や、先住民族など政治的マイノリティの人たちには、自分たちの暮らしと教育のギャップは深刻だった。そうした人たちに、PBEは変化を求める理論的枠組みとなった。

以下、まずはさまざまな定義から概観してみることにする。

2 さまざまな定義や考え方

アメリカの環境教育団体、オリオン協会は、PBEは自然と文化の関係性についての在来知を高めるような教育であり、自然環境の保全や配慮された意思決定を促すもの (Orion Society, 2002) と説明する。Sobel(2004)は、PBEは、国語や数学などすべての概念を教える出発点として、地域社会と自然環境を利用することと述べる。

19世紀にジョン・デューイは、学校での学びと日々の生活が無関係であることを「非常な無駄」としているが、20世紀にも学校と地域社会の隔離は繰り返し指摘されてきた (e.g. Lindholdt, 1999)。学校教育に関してPBEは、学校と地域社会の壁を低くし、学びの場を建物の中だけでなく、地域社会とそこにある自然環境の中へ移していこうとする。スミス(2012)によれば、PBEは子どもたちの成長過程に、地域を組み入れるものだ。

生徒の学習が社会に役立つものとなるよう教員は努力し、子どもたちには早いうちから、自分たちの力で家族や近所の人びとの暮らしを良くすることができることを教えていく (スミス, 2012)。そのために、教員は地域の人びとや組織と連携し、それによってさらに地域が学びの場になっていくという。

人類は世界中どこでも、その地域で学ぶ事によって生き伸び、暮らしと歴史をつむいできた。学びは人が暮らす所にあった。生きていくためにはその場に根ざした、包括的な知識がなくてはならない。形式知や科学知だけでなく、経験や感覚を通した身体知や暗黙知が重要だったはずだ。教育が自然環境と暮らしの場から引き離され、建物の中で「教育」を受けるようになったのはわずか

150年くらいの話でしかない。

Orr (1992)の表現では、PBEとは、ある場所で「良く生きる」方法について、再教育することであり、その場所についての詳細な知識、そこに根ざしているという感覚を養うものだ。Haas and Nachtigal (1998)は、「良く生きる」とは周囲の環境や他人との関係であり、それは個人が選ぶことと主張する。

また「良く生きる」は、Gruenewald (2008)が提案する「批判的な場の教育」の枠組みにも通じる。これは、社会的な抑圧や不正義を発見し、それを取り除き、他者や自然を犠牲にすることなく、その場で「良く生きる」ことを目指すものだ。排他的に「富」を追いか求め、文化的、生態的な破壊が続く現状についても、PBEによって人びとが場とのつながりを回復し、地域についてより総合的な理解を持つことは一つの対抗策になるのではないかとされる。これらの議論においてPBEは、生態系や地域について知ることにとどまらず、生き方や社会のあり方、人類のサバイバルに迫るものとして位置づけられる。

「場の教育」について岩崎は、「地域に目を向け、地域の再生を担う主体的・再帰的な学びと活動の方法」(2010 p29)とする。

PBEのさまざまな定義や考え方には、地域社会や暮らしの場に着目し、環境と社会を構成する多様な要素をつなぎ、そのつながりを理解する、という点で共通点が見られる。他にも生態系教育、バイオリージョン教育、場のカリキュラムなどにおいて、近いコンセプトが見られ、広義の環境教育や「持続可能な社会のための教育」とも一致する点が多い。しかし実際にそれがどのような意味を持ち、どう展開され、何が重視されているかは、それぞれの地域、文化や社会において少しずつ異なっている。例えば北米の町では、実際に地域の課題解決や変革につなげることが強調され、北米の先住民族においてPBEは、アイデンティティや健康や幸福感 (well-being) に大きな意味を持っている (Takano, 2004)。

3 グローバル社会とPBE

PBEに関しては、現代社会の中での意義が論じられる必要があるだろう。世界中でグローバリゼーションと都市化が進行し、人びとは生涯で一つの地にとどまらず、国をまたいで複数の場所を転々とする。日本の農山村においても核家族化が進み、小規模な商業は成立せず、「長男が家を継ぐ」という考え方はもはや主流ではない。集落の統廃合も進み、複数の場所で旧来からの土地の名前が消えた。

私たちは環境的にも経済的にも政治的にも地球規模で相互依存関係にあり、その意識も度合いも高まっている。多くのことが、国の枠組みを超えて考え、対応されなくてはならないし、インターネットによって国境は人びとの意識から消滅し、市民レベルの活動やコミュニケーションはグローバルだ。

そんな中、地域に注目し、地域を学びの場とするPBEには意味があるのか。

グローバル化がより進んでいる現在、スミス (2012)は特にアメリカの文脈において、学校教育に関してはPBEを実践する4つの理由があると述べる。1つには、PBEが対象とする事柄ややり方によって、子どもたちの学ぶ意欲を総合的に大きく高めること。次に、PBEは自然の中での体験を促し、生態系の知識を高め、人が生存も経済活動も健全な環境に拠っていることを認識させること。3つめに、学校が教育の重点を、経済活動に貢献する人材育成から社会関係資本の蓄積へと向かわせること。最後に、PBEは新しい思考を生み、よって過去の解では通用しない新しい課題に対して、考え、行動する力を養うこと、だ。

またこれまでの研究から、PBEはアイデンティティの構築に貢献するとされるが、アイデンティティの確立は個人の基盤であり、どこで何をするに関わらず、人生でさらなるチャレンジをしていくために欠かせない。

社会構成主義の立場からも、Masseyは場や地域、地元についてのグローバルな感覚が求められるとする (Massey, 1994)。それはDescola and Pálsson (1999)がグローバリゼーションは地域や

地元の課題や懸念を消し去るのではなく、それをさらに明確にすると論ずるのと同様だ。

人びとが複数のアイデンティティを持つように、場所についても同様で、グローバリゼーションは各地を均一化するのとは反対に、多様で複雑な社会関係によって、新しい特性をその「場」に与える(Massey, 1994)。人びとが複数の場所で暮らし働き、訪問する状況においても、複数の場についての理解やそことの結びつきは、グローバルな社会で暮らす人間たちには欠かせない。

4 PBEの目指すものと地域

一方、これまでの教育、特に学校教育が地域と切り離されていたという指摘につながるものとして、教育者は無意識のうちにも、学習者と場との関係を希薄にする方向に関与しているという認識がある(Corbett, 2007; Haas & Nachtigal, 1998; 岩崎, 2010)。個人的な成功やより高い収入を目指し、人びとは地域との関係を手放す。かつては人生の意義や目的の中核を占めていた、土地や他の人たちとのきずなを、物質的な豊かさや快適さで置き換えてしまい、それが現代社会の引き起こす破壊と混乱を包み隠してしまうとスミス(2012)は主張する。

これらは、子どもたちを地域につなぎとめておくべきという主張ではなく、子どもたちが地域との絆を持つ機会を得ず、そこで貢献できる知識や技術、経験を与えられず、結果として建設的な住民として地域に留まる選択肢がないことが問題にされている。

PBEは子どもたちの学ぶ意欲を総合的に高め、幸福な人生を自分で歩める準備をし、自分たちで社会の課題を解決する意欲と信念を持つ人づくりが目的だ。しかし、そのプロセスとして、その地域について深く学習したり、そこで暮らすすべを覚えたりすることを無駄に思う親たちもいる。PBEを実践しているアラスカのロシアンミッション学校(ほとんどの生徒がアラスカ先住民)での筆者による調査でも、ある親は「自分の子どもたちにはこの村で暮らすすべは必要ない」と語り、教科書からの知識だけを教えて欲しいとの意

向があった(Takano, 2004)。アイデンティティや地域との絆、課題解決力よりも、試験に通る技術や学力を望む声は少なくないだろう。

ロシアンミッションではしかし、PBEをカリキュラムに組み込んでから生徒が意欲的に学習し、子どもと教員や学校との関係が前向きに変わり、学校の他の活動も子どもらが積極的に引き受け、アラスカ州の共通テストにおいて、生徒たちの成績がぐんぐん上がっていった。他の学校全体の平均が下がった時でも、ロシアンミッション学校だけは上昇した。結果、ロシアンミッションの学校区で唯一、州が定める「年次学力向上目標」をクリアした。

ある地域社会にとどまり、地域との関係を「豊かさ」と見なしてそこで貢献する住民と、グローバル社会の中で「活躍」する人と、理論的には両方に役立つフレームワークを持っているのがPBEではあるが、そこに緊張感があることは否めない。

「場」に適した教育が、すべての子どもたちに適した教育なのか。教育は何の、誰のためにあり、何をを目指すのか。地球のあらゆる事象が絡み合い、個々人もグローバルな枠の中で思考し、活動するようになった現代における、教育の根本的な問いの中にPBEの議論はあると言える。

5 日本の中でのPBE

日本での「地域に根ざした教育」の概念について見てみよう。

明治始め、今から140年ほど前に導入された制度としての「近代学校教育」は、明治後期からは、統率のとれた国民国家を目指すために活用された。岩崎はその時から学校教育の基調はずっと、「地元を捨てさせる教育」(2010 p21)だったのでないか、と述べる。

大正から昭和初期にかけて、土地に根ざした教育の運動は、地元・地域から人を切り離してしまう学校教育や都会中心主義への対抗運動としてあった。

戦後、学校教育は、都市化を進め経済成長に役立つ人を育てる場となった。近代化、民主化、合

理化の理念が掲げられ、地元や場からのかい離が開放や自己実現の方向となった。

そうした中で明治後期以降、「土地に根ざす」特徴を持った教育は常に、そうした動きに歯止めをかける力として提唱されて来た(岩崎, 2010; 大田, 1989)。

戦後、1945-50年の地域と教育の運動は、中央集権を批判し、地方分権の民主主義の理論を元に展開されたが、「大衆の積極的な抵抗から打ち出されるという支柱をもたなかったのが致命的」(大田, 1989 p138)で、実践上の足がかりと理論的展開の条件を失い、「教育投資論に基づく国家主導の総合長期教育計画論によってとどめをさされた」(藤岡, 1977 p217)。

60年代後半から70年代、経済優先の開発、国家主義と能力主義によって現れたひずみを子どもたちが受けていることが危機感となり、教員や親たちを中心とした運動が高まった。教育が、経済成長に資するマンパワー開発のための投資となっているという批判の中、70年代後半には、コミュニティエデュケーションとして地域教育の再編が論じられた。その3つの軸が、地域生涯学習社会、地域に根ざす学校、地域教育全体の統合と住民主体の計画化、であった(国民教育研究所 & 環境と教育研究会, 1985)。

藤岡(1977)は、70年代は、家庭と地域社会における教育力の再生と、学校との再結合が課題であったとし、「教師たちが地域に根ざすことによって教育と学校を青少年のために取り戻すことを考え始めた」(p218)時期だったという。

これほど力強く問題意識が提示され、民間の運動とも言えるほどの「地域に根ざす教育」だったが、主流にはなり得ず、中央政権の経済優先の方針の元、共同体破壊はさらに進み、「地方」ではますます教育は地域から離れていく。

1990年以降は、地域学、地元学、総合的な学習の時間、歴史・文化体験、エコツーリズムなど、取り組みによって多いにばらつきがあるとしても、場に根ざす要素を持つと推察される活動が広がりを見せている。

21世紀に入り、人びとは地球規模で新たな課

題や問題を抱えている。環境問題はますます深刻になり、個人でも実感できるレベルになってきた。経済格差も広がる一方だ。日本社会では高齢化が進み、高度経済成長期のモデルの福祉では追いつかない。個人の生き方も死に方も揺れている。

そんな中、「地域に根ざす教育」は新たな位置づけを持って議論される価値がある。アイデンティティを土台とした個人の生きる力、自立して課題を解決していく力、地球を視野におきつつ地域全体で生き抜く力につなげていく可能性を持つ。

私は2011年から7名の委員たちと、日本各地における「地域に根ざした教育」についての調査や議論を始めている。成果は後日発表の機会を得たいと思う。

V おわりに

ここまで、場や地域の概念やPBEの背景や発達について、概観を試みた。触れることができなかった側面がまだまだある。

PBEは、公平で平和な、持続可能な社会を目指すことに貢献するものだ。自然や人との関係性を包括する「場」と、そこでの体験を取り上げることは、環境教育だけでなく、野外教育研究においても興味が重なる。「場」やplaceの視点から考察することは、一人一人が手がけている野外または環境教育の研究や実践を深め、広げることにつながる期待がある。

具体的なやり方や重点において、世界各地で特徴がある。すでに100年以上、場に根ざす教育の潮流が見られる日本では、今、再び場の教育を位置づける意義や価値について、多様な実践を通して、さまざまな研究の可能性があると考える。

引用文献

- Altman, I. A., & Chemers, M. (1984). *Culture and environment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Barr, I. (1998). Environmental education and sustainable development. In J. Smyth (Ed.),

- Learning to sustain*. Stirling: Scottish Environmental Education Council, University of Stirling.
- Basso, K. (1996). Introduction. In S. Feld & K. H. Basso (Eds.), *Senses of place* (pp. 3-12). Santa Fe, N.M.: School of American Research Press.
- Berry, W. (1978). *The unsettling of America: Culture & agriculture*. New York: Avon Books.
- Bourdieu, P., & Passeron, J. C. (1994). *Reproduction in education, society and culture* (R. Nice, Trans.). London: Sage.
- Capra, F. (1997). *The web of life: A new synthesis of mind and matter*. London: Flamingo.
- Casey, E. S. (1996). How to get from space to place in a fairly short stretch of time: Phenomenological prolegomena. In S. Feld & K. Basso (Eds.), *Sences of place* (pp. 13-52). Santa Fe, NM: School of American Research Press.
- Chawla, L. (1999). Life paths into effective environmental action. *Journal of Environmental Education*, 31(1), 15-26.
- Corbett, M. (2007). *Learning to leave: The irony of schooling in a coastal community*. Black Point, Nova Scotia, Canada: Fernwood.
- Cuthbertson, B., Heine, M., & Whitson, D. (1997). Producing meaning through movement: An alternative view of sense of place [electric version]. *Trumpeter*. Retrieved 15 October, 2002, from <http://trumpeter.athabasca.ca/content/v14.2/cuthbertson-heine-whitson.html>
- Descola, P., & Pálsson, G. (1999). *Nature and Society: Anthropological perspectives*. London: Routledge.
- Giddens, A. (1990). *Consequences of Modernity*. Stanford, CA: Stanford Univ. Press.
- Gieryn, T. F. (2000). A Space for Place in Sociology. *Annual Review of Sociology*, 26, 463-496.
- Gruenewald, D. (2008). Place-based education: Grounding culturally responsive teaching in geographical diversity. In D. Gruenewald & G. Smith (Eds.), *Place-based education in the global age* (pp. 137-154). New York, London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gruenewald, D., & Smith, G. (2008). Introduction: Making Room for the Local. In D. Gruenewald & G. Smith (Eds.), *Place-Based Education in the Global Age*. New York: Taylor & Francis Group.
- Haas, T., & Nachtigal, P. (1998). *Place value: An educator's guide to good literature on rural lifeways, environments, and purposed of education*. Charleston, WV: Appalachia Educational Laboratory.
- 張本文昭, 2002, 「自然を感じるころ-温故知新」, 筑波大学野外運動研究室編, 『キャンプの知』, 勉誠出版, 東京.
- Harvey, D. (1993). From space to place and back again: Reflections on the condition of postmodernity. In J. Bird, B. Curtis, T. Putnam, G. Robertson & L. Tickner (Eds.), *Mapping the futures: Local cultures, global change* (pp. 3-29). London, New York: Routledge.
- Heidegger, M. (1993). *Basic writings: From 'Being and time' (1927) to 'The task of thinking' (1964)* (D. F. Krell, Trans. Rev. and expanded ed.). London: Routledge.
- 土方圭, personal communication 2013.07.24
- 土方圭, 2013, 「野外教育における「野外」概念の検討ー「場所」および「風土」という観点からー」日本野外教育学会第16回大会, 京都教育大学.
- 岩崎正弥, 2010, 「場の教育の可能性」, 『場の教育』, 農山漁村文化協会, 東京, pp. 17-192.
- Kahn, M. (1996). Your place and mine: Sharing emotional landscapes in Wamira, Papua New Guinea. In S. Feld & K. Basso (Eds.), *Sences of place* (pp. 167-196). Santa Fe, NM: School of American Research Press.
- 金子和正, 2002, 「野外教育における「場」(環境)の提供が意味するもの-アフォーダンスからの

- 考察-」, 筑波大学野外運動研究室編, 『キャンプの知』, 勉誠出版, 東京.
- 国民教育研究所・環境と教育研究会編, 1985, 『地域開発と教育の理論』, 東京.
- Lindholdt, P. (1999). Writing from a sense of place. *Journal of Environmental Education*, 30(4), 4-10.
- Massey, D. (1994). *Space, place and gender*. Cambridge: Polity Press.
- O'Sullivan, E. (1999). *Transformative learning: Educational vision for the 21st century*. London; New York: Zed Books.
- Orr, D. W. (1992). *Ecological literacy: Education and the transition to a postmodern world*. New York: State University of New York.
- Orr, D. W. (1994). *Earth in mind: On education, environment, and the human prospect*. Washington, D.C.: Island Press.
- 大田堯, 1989, 『地域の中で教育を問う』, 新評論, 東京.
- Palmer, J. A. (1998). *Environmental education in the 21st century: Theory, practice, progress and promise*. London: Routledge.
- Palmer, J. A., Suggate, J., Bajd, B., K.P., P., Ho, R., Ofwono-orecho, J., . . . Van Staken, C. (1998). An overview of significant influences and formative experiences on the development of adults' environmental awareness in nine countries. *Environmental Education research*, 4(4), 445-463.
- Reed, P., & Rothenberg, D. (1993). Nils Faarlund. In P. Reed & D. Rothenberg (Eds.), *Wisdom in the open air* (pp. 155-176): University of Minnesota Press.
- Relph, E. (1976). *Place and placelessness*. London: Pion.
- Relph, E. (1989). Geographical experiences and being-in-the-world: The phenomenological origins of geography. In D. Seamon & R. Mugerauer (Eds.), *Dwelling, place & environment: An introduction*. New York: Columbia University Press.
- Smith, G. (2007). Place-based education: breaking through the constraining regularities of public school. *Environmental Education Research*, 13(2), 189-207.
- グレゴリー・スミス, 2012, 「持続可能な社会づくりを目指した『地域に根ざした環境教育』モデルの構築」『2012年1月国際シンポジウム報告書』, エコプラス, 東京.
- Sobel, D. (2004). *Place-based education: Connecting classrooms and communities*. Great Barrington, MA: Orion Society.
- Sterling, S. (2001). Education in change. In J. Huckle & S. Sterling (Eds.), *Education for sustainability* (Reprinted ed.). London: Earthscan.
- Sward, L. (1999). Significant life experiences affecting the environmental sensitivity of El Salvadoran environmental professionals. *Environmental Education Research*, 5(2), 201-206.
- Takano, T. (2004). *Bonding with the Land: Outdoor and environmental education programmes and their cultural contexts*. University of Edinburgh, Edinburgh.
- Takano, T. (2006). Essence of Friluftsliv: Outdoor Education in Alaska and Japan. *the Norwegian Journal of Friluftsliv* 01.06, 2006. from <http://www.hint.no/~aaj/articles.htm>
- Takano, T. (2007). "Respect": Representation and difference in Scotland and Nunavut. In M. Reiss, R. DePalma & E. Atkinson (Eds.), *Marginality and difference in education and beyond*. Stoke on Trent: Trentham Books.
- 高野孝子, 2009, 「大地とのつながりを求めて (1) —アラスカ州コディアック島での教育プログラムとアイデンティティの構築—」, 『北海道北方民族博物館紀要』, 18, 29-58.
- 高野孝子, 2011, 「農山村のひとと暮らしが支える地域の教育力」, 『社会教育による地域の教育力強化プロジェクト』における実証的共同研究』, エコプラス, 東京, pp.4-26.

- 高野孝子, 2012, 「大地とのつながりを求めて (3) ヌナブト準州イグルーリクでの伝統的技術を伝えるプログラム」, 『北海道立北方民族博物館研究紀要』, 21, 19-40.
- Takano, T., Higgins, P., & McLaughlin, P. (2009). Connecting with place: implications of integrating cultural values into the school curriculum in Alaska. *Environmental Education Research*, 15(3), 343-370.
- Terry, M. (1971). *Teaching for survival*. New York: Ballantine Book.
- Thomashow, M. (1995). *Ecological identity: Becoming a reflective environmentalist*. Cambridge, MA; London: MIT Press.
- Titman, W. (1994). *Special places, special people: Hidden curriculum of school grounds*. Godalming, England: World Wide Fund for Nature.
- Tuan, Y.-F. (1976). Geopietry: A theme in man's attachment to nature and to place. In D. Lowenthal & M. Bowden (Eds.), *Geographies of the mind: Essays in historical geosophy*. New York: Oxford University Press.
- 束原昌朗, 1990, 「野外教育における風土概念導入に関する一考察」, 『東京学芸大学紀要』第5部門、芸術・体育, 42, 109-115.